

# 7月・8月の管理ポイント

今年は梅雨入りが全国的に遅めの傾向にあり、気温も平年よりも高くなると予想されています。芝生にも多くのストレスが掛かる時期となりますので、万全の夏越し対策をしていきましょう。



根の生育しやすい  
土壌環境を整えましょう

## レボ

近年は梅雨明け後も台風やゲリラ豪雨などの短時間での大量降雨が増えています。レボは排水性が高く表層土壌の水分値を低めに保つため、過湿状態になりがちな降雨後にも気相をしっかりと保ちます。定期散布を行い根の生育しやすい土壌環境を整えましょう。

スポット処理や張芝した箇所には手播きしやすい粒剤タイプのハイドレーターGがおすすめです。  
使用量：2ml/m<sup>2</sup>/月 散布水量：200ml~500ml/m<sup>2</sup> 散布回数：1ヶ月に1回~2回

高親水性土壌用界面活性剤

## バイタルドロップ

高親水性のバイタルドロップは、散布時に葉の表面や表層の撥水性土壌に付着する量が少なく、深い層まで素早く届いて処理層を形成します。散布液が高濃度になる少量散布でも高い効果が得られます。真夏にも安心して使用できる安全性の高い製品です。ドライスポットの予防と治療、どちらの目的でもご使用いただけます。

ドライスポットの予防 使用量：1ml/m<sup>2</sup>/月 散布水量100ml/m<sup>2</sup>以上  
ドライスポットの治療 使用量2ml/m<sup>2</sup> 散布水量100ml/m<sup>2</sup>以上

サッチの除去  
土壌環境の健全化

## サッチクリーナー

サッチ成分のセルロース・ヘミセルロースを分解する酵素を主成分とした、酵素タイプのサッチ分解剤です。酵素そのものを散布するため即効性に優れており、サッチ分解量をコントロールすることが可能です。液剤であるため取扱いやすく、フィルターに詰まりません。農薬との混用や近接散布も可能です。土壌の透水性を改善しましょう。

土壌微生物が活発な時期になるので、微生物タイプのサッチ分解剤「サッチ・マネージャー」もおすすめです。  
使用量：グリーン0.2ml/m<sup>2</sup> ラフ・FW・Tee0.1-0.2ml/m<sup>2</sup> 散布水量0.2-0.5ℓ/m<sup>2</sup>

強光ストレス予防

## インターセプト

梅雨が明けると急激に日差しが強くなります。ベントグラスにとって強すぎる太陽光は強光ストレスを引き起こす原因となります（過剰に取り入れた光により活性酸素が発生し細胞が傷つけられる）。インターセプト処理で、強すぎる光（ベントグラスが吸収する波長の可視光、紫外線）をカットし、強光ストレスを軽減しましょう。

使用量：1000-2500倍 散布水量：100-500ml/m<sup>2</sup> 散布間隔：7-10日

高温ストレスから  
ベントを守る

## ヒートファイター

ヒートファイターは、夏の厳しい暑さをベントグラスが生き延びる為のお勧め資材です。有効成分「ゼルンボン」が細胞を刺激することで植物自体が持つ高温耐性が活性化、通常では弱体化・致死してしまう程の高温でも生き延びられるようになります。梅雨明け前からの予防処理で、芝生の高温耐性を引き出しましょう。

使用量：0.5ml/m<sup>2</sup> 散布水量：100-500ml/m<sup>2</sup> 散布間隔：14日

土壌中の有害物質除去

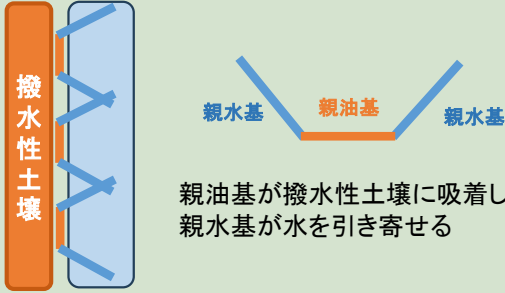
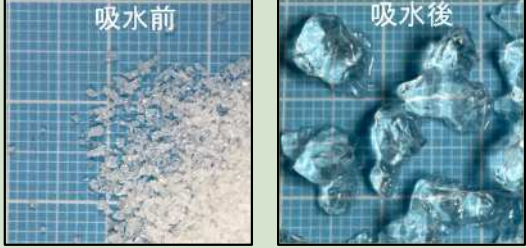
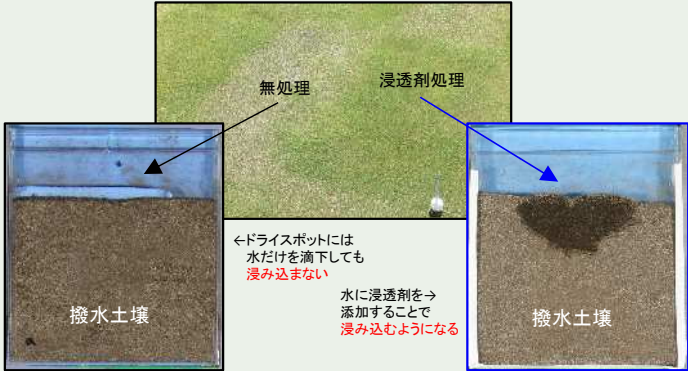
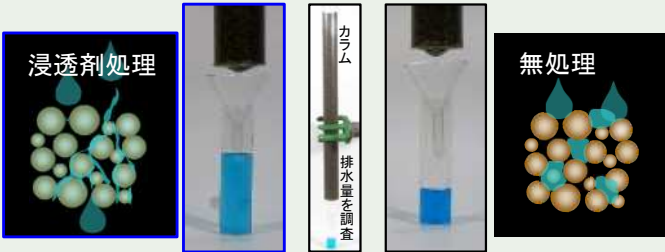


## 光合成細菌

過湿状態の土壌中に発生しやすい硫化水素やメルカプタンなどは、イヤな臭いがするだけでなく根を痛めます。光合成細菌を処理して有害物質を除去しましょう。光合成細菌は硫化水素などを分解するだけでなく、他の有用微生物の餌となるアミノ酸やATP、ADP（高エネルギーリン酸化合物：補酵素）などを分泌し、有用な土壌微生物の住みやすい環境を作ります。サッチ分解剤と組み合わせると、サッチを効率よく分解できます。

使用量：1~2ml 1ℓ/m<sup>2</sup>散布 月1~2回

# 浸透剤と保水剤の違い

浸透剤の紹介をしていると、「浸透剤と保水剤はどう違うの?」という質問をよく頂きます。どちらも水管理に使用する資材のため混同しやすいものですが、効果や目的には大きな違いがあります。そこで今回は、浸透剤と保水剤の違いについて紹介します。

	浸透剤	保水剤
主成分	<p><b>界面活性剤</b></p>  <p>親水基 親油基 親水基</p> <p>親油基が撥水性土壤に吸着し、親水基が水を引き寄せる</p>	<p><b>高分子吸水ポリマー</b></p>  <p>吸水前 吸水後</p> <p>自重の150~200倍程度の水を抱え込むことが出来る</p>
使用目的	<p><b>土壤中の水分を適切な量に保つ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ドライスポットへ水を浸透</li> </ul>  <p>無処理 浸透剤処理</p> <p>撥水土壌 撥水土壌</p> <p>←ドライスポットには水だけを滴下しても浸み込まない</p> <p>水に浸透剤を→添加することで浸み込むようになる</p> <p>撥水性が高い箇所に水を浸透させる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・過剰な水の排水</li> </ul> <p>砂を充填し、限界まで水を含ませたカラムに水または浸透剤希釈液を滴下し排水量を比較した</p>  <p>浸透剤処理 無処理</p> <p>カラム 排水量を調査</p> <p>↑水の表面張力を下げたため、浸透剤を滴下したカラムからの排水量が多い</p> <p>土壤中に滞留した水の排水を促す</p>	<p><b>保水性の改善</b></p> <p>土壤に混合することで、保水性の低い土壤中に水を保持する造成直後のサンドグリーンや砂漠の緑化などに使われる</p>  <p>土壤中の吸水ポリマー</p>  <p>土壤が乾燥するにしたがって吸収した水を植物に供給、水のタンクとして働く</p>

どちらも水管理のための資材ですが、浸透剤は「水の足りない場所へ供給、過剰な場所からは排出し適切な量に維持」、保水剤は「保水性の低い土壤への水の保持」と、効果に明確な違いがあります。水管理においても、使用目的に合わせた資材を選択することが大切です。